『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻　十（終）

狂　言　研　究　会

愛知県立大学附属図書館の貴重書の中に『文久写本狂言集』半紙本十五冊がある。文久元年（一八六一）から文久二年（一八六二）にかけて書写されたもので、写しとしてはさ程古くはないが、狂言台本として八十四曲を収めるほか餅酒などの小舞も書きとどめている。内容を調査すると、「是ハ此隣の者て御座る」（心奪ほか）のように「あたり」を「隣」の字を用いて記す鷺仁右衛門派の特徴を持ち、台本としては『鷺賢通本』に酷似するものであることが判明した。したがって、『日本古典全書　狂言集』上中下（朝日新聞社）に収められた狂言の原態を示しているかと思われ、また古典全書に収められなかった曲も少なからずこの『文久写本狂言集』に収録されて、四十余曲に及ぶので、ここに翻刻することによって、『鷺賢通本』の補強に一役を担うことが期待されるものである。

以下に所収曲を載せ、『日本古典全書　狂言集』にないものには○印を付した。

① 心奪　止動方角　二人袴　伊呂波　○花争　○氏結
② ○骨皮　○宝の瘤取　○菊水祖父　井礑　名取川
③ ○棒縛　○文荷　鱸包丁　連歌盗人　○人歟杭歟
④ ○苞山伏　○鬼の小槌　三人片輪　昆布売
⑤ ○飛越　福の神　瓜盗人　萩大名　○薩摩守
⑥ ○文相撲　○鼻取相撲　○鳴神　○地蔵舞　二千石
　○文蔵
⑦ 柿山伏　鈍太郎　伯養　○悪太郎　茶壺
⑧ 抜空　伯母が酒　しひり　墨塗り　○空腕
⑨ 膏薬煉　○鶏聟　狐塚　○栄螺　○土筆
⑩ ○酢辛　○吃り　○鏡男　犬山伏　○太刀奪
⑪ ○小舞（餅酒、雁厂金、同、弓矢立会、三人夫、鶴

亀、若松、勝栗、松楪、土車、七ツ成子、宝の瘤取、掛川、泰山府君、宇治の晒、暁明星、最物細、京土産、小山伏、十七八、末の松山、雪山、福の神、先文、あの山、海道下、石引、番匠屋、鎌倉女郎、春雨、杉の木、住吉、鵜飼、善界、八島、加茂、笠之段、玉之段、山姥、鞍馬天狗、景清、猩、蝉丸、放下僧、道明寺、紅葉狩）

○物真似　寝音曲　○早漆　伊文字　腰祈　○呼声

素袍落

⑫ 末広加利　○柑子　○不聞座頭　○磁石　文山立

○呂蓮　餅酒　恵比須毘沙門

⑬ ○鎌腹　○内沙汰　合柿　○鬼ノまゝ子　○仁王

⑭ 塗師　米市　八句連歌　栗焼　花盗人

⑮ 八幡の前　○鐘の音　○惣八　千鳥　○仏師

布施無経　○縄なひ　○歌仙

今回は「あいち国文第９号」に掲載した『文久写本狂言集』翻刻九につづくものである。

凡例

一、底本は『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵の貴重書）である。

一、底本は当て字の非常に多いものであるが、できる限り忠実に翻刻することを原則とした。但し、読解の便と印字の煩雑さを避けて以下のような処理を施した。

1 漢字は現在通行の字体に統一した。異体字・略体字なども原則として通行のものにした。

（支→事　凉→涼　臺→台　嬉→嬉　迚→迄など）

但し、哥・躰・坐はそのままとした。

2 台詞は平仮名、ト書は片仮名を原則としているが、台詞中の助詞に使用の多いハニトノなどはそのままとした。

3 「・〆・〆・㐂・㐂・㐂などの合字は開いて、それぞれコト・シメ・シテ・トキ・トモ・よりとした。

4 句読点も底本のままとした。台詞の変り目にいくらかの空白を設けているが、適宜判断して句切りに一字分空ける処理をした。

5 誤記と判断し得る場合も修正せず（ママ）と傍記した。

6 謡の部分に付されたゴマ点は省略した。

〔千鳥〕

千鳥

是ハ此隣の者て御座る　召仕ふ者を呼出て申升る事か御座る太郎冠者居るかやい　ハア　有るか　御前に　汝を呼出すハ別の事ても無い今晩客来を申請るに依て毎の酒屋へ行て酒をとつて来イ　畏て御座れ共此御使ハ御免されて下されませひ　汝ハなせにさふ云ふそ

此方にも思召ても御ろふしられい前〻の酒代をも遣され
ませひて参りたりとも詰ておこそふとハ申升舞　此御使ヲハ
御免るされて被下ませい　汝ハそふ云ふて日外(イツソヤ)も取て来た
てハないか　〻(シ)あの時分もをこす舞と申て御座るを私の
口調法を以て取つて参つて御座る今晩の御客来をは
延させられたならハ能ふ御座りませふ　辞〻何れもへ廻
状を廻いたれは皆〻御座らふと有て点か掛て来て延す事ハ
ならぬ何卒汝か才覚を以て取て来　其儀ならハ畏て
御座る　早ふいてこひ待て居るそ　ハア　扨も〳〵是ハ
迷惑なお使を仰付られた頼ふた人にハ了間も無イ前〻の
酒代(ヲ)を遣ハされいて参つたりとも詰ておこそふとハ申廻
乍去参るからて御座る程に面白おかしう申ないて借つて参ふ
と存る辞参る程に是じや物申案内申　辞表に案内
と有る案内とハ誰そ物もふとハ　私て御座る　えい能ふ
こそおりやつたれ　此間ハ久しうお見廻も申ませぬか何も
替らせらるゝ事も御座りませぬか　中〻変事も無して今日
何と思ふておりやつたそ　只今参るハ別の事ても御座らぬ
毎も通り酒を詰てやつて被下れい　安い事なれ共和御侶
も思ふても見さしませ前〻の酒代をも算用召されいて
何と酒か詰てやらるゝ物ておりやる　近日急度算用せふと
申されて御座る程に何卒詰てやつて被下い　辞今日ハ
算用せふの明日ハ算用せふのとおしやれ共一円算用か無酒か
ほしくは代りを持ておりやれ　殊に今晩ハ珍客ても御座れハ
何卒此方の心入を以詰てやつて被下い　辞〻某の心入て詰
てやる事ハ成らぬ酒かほしくハ代を持ておりやれ　扨ハ如
何程に
申ても詰てやらせらるゝ事ハ成ませぬか　如何な〳〵詰て
やる事
ハならぬよ　はて扨夫ハ迷惑な事て御座る辞申私ハ呆と
失念の致た事か御座る　夫ハ如何様な事ておりやる　前〻
の酒
重ての事今日のをハ代りを持て参つて御座る　やあ〳〵今日
のハ代りを持て来た　中〻　夫ならハ詰てやらいて何とせ
ふ少と
夫に待しませ　心得て御座る　（ト三足跡ヘ戻ル　ヨリ腰桶持取正面ヘ出ス　酒屋後見）　辞喃〻
代りを持て来たとおしやるに依て毎のよりハ念の入ており
やる
実と御念か入つたと見へ升て先外家からか立派に御座る定
て頼ふ人の待ておられま升程に早ふ持て参り悦は（ト腰桶取ニ行）せ升う
是〻先お待ちやれ代りを置て行しませ　実と代りを進る（ト立跡ヘ帰ル）
筈て御座つた更ハ進せま升　何と代りハおりやるかや　慥頼
うた人のお手より請取懐へ入れたかと存て御座るか定て宿に
置て参つた物て御座ふ代りハ只今持て参る（ト又腰桶ニ取付）　辞〻代の無内
ハ遣す事ハならぬ　只今持て参り升る　はて扨ならぬと云
へハ
はて扨是ハ迷惑な事て御座る　和御侶か其如くおしやるに依

詰てやり度い物なれ共少トやられぬ子細かをりやる　夫ハ
如何な
事て御座る　別の事ても無此間ハ外て酒を取ると見て此方
えハすきと見へぬ其様な行届ぬ事てハ詰てやる事ハならぬよ
扨ハ此間参らぬに依てさ様に被仰れ升るか　其通しや
此間参らぬにハ少と子細か御座る　夫ハ如何な事ておりや
るそ
頼ふた者か尾張の津島祭りを見物に参られて其供に参つて
御座るに依て夫故参りませなんた　何しや尾張の津島祭りの
見物の供にいた　中〻　是ハ聞及ふた神事ておりやる嘸面白
事ておりやらふ　中〻先路次すから面白ふ御座る　酒〳〵さ
ふ有ふ
とも　伊勢浦て千鳥を追まするか是か面白イ事て御座る
何と夫を咄イて聞する事ハ成舞か　何か扨咄て聞せま升
先浜辺へ大きう網を張まして老若共に扇をかさいて
浜千鳥の友呼声ハと申て追升れハ千鳥かちり〳〵や
ちり〳〵と申て懸り升ルか是か面白イ事て御座つた　是ハ面
白かろふ何と夫を少ト学ふて見する事ハなるまいか　尤
学ふても見せま升か是にハ相手か入まする　何しや相手か
入る　中〻　相手にハ誰か能かろふそ　されハ誰か能ふ
御座りま升そ　やあら誰かよかろふそ辞噛〻誰彼と云ふ
よりも某か成ふ　此方被為成る、か　中〻夫ならハ此方にハ
扇をかさいて浜千鳥の友呼声ハと云ふてはやさせられい
私の千鳥の掛る体をまなふて見せませふ　夫ならハ
少ト云ふて見うか　能ふ御座りま升　酒や扇ヲヒロケカザシ　浜千鳥
友呼声ハ〳〵何とておりやる　一段と能ふ御座る急てはや
させられい　心得た　浜千鳥の友呼声ハ〳〵　ちり〳〵
やちり〳〵ちり〳〵やちり〳〵と散飛たり　浜千鳥の
友呼声ハ　チリ〳〵ヤチリ〳〵チリ〳〵やチリ〳〵ア、申〻
其様に此方を見張て御座つてハ千鳥か恐れて掛りませぬ
此方を見ぬ様にしてか　中〻　心得ておりやる浜千
鳥の友呼声ハ　チリ〳〵やちり〳〵チリ〳〵ヤチリ〳〵
と散飛たあり　浜千鳥の友呼声ハチリ〳〵ヤチリ〳〵
チリ〳〵ヤチリ〳〵〳〵〳〵　噛〻夫をはとちへ持て
おりやる　シテ下ニ居ス　是ハ千鳥の掛つた体て御坐る　辞千鳥ハ掛
らす共能ふおりや夫（ママ）をこちへおこさしませ　辞申爰に山か
御座ツたか是か面白事て御座りました　夫ハ面白からふ夫
をも咄イて聞さしませ　何か扨咄て聞せませう先思ひ〳〵に
山を出来升（シツライ）ててふさやよふさと申て山を引升るか是か面白
事て御座つた　何と夫をもまのふて見する事ハ成廻か　尤学
うても見せま升か是にハ山か入升る　何しや山か入ル　中〻
山にハ何か能からふそ　去れは何か能ふ御座ふそ
やあら何かよからふそ　いや申幸あの樽に緒か附て
居り升るあれを山の心に致て引ませふ　是ハ一段と能ふ
是にも相手か入升る　相手か入らは是も某か成ふ
夫ならハ此方にハてふさややふさと言ふてはやさせられい

私の山を引体学ふて見せ升う　是も少と云ふて見うか
能ふ御座り升ふ　てふさややふさやふさやてふさ何とて
おりやる　一段と能ふ御座る急てはやさせられい　心得て
おりやる
てふさやよふさよふさやてうさ　えいさら〳〵えいさら〳〵
よふさやてふさてうさややふさ　やつとこ〳〵やつとこな
てふさやよふさよふさやてふさ　やつとこ〳〵やつとこな
てふさやよふさよふさやてふさ　やつとこ〳〵やつとこな
てふさやよふさよふさやてふさ　えいさら〳〵ゑいさら〳〵
〳〵〳〵〳〵　〳〵喃〳〵夫をはとちへ持ておりやる　是山引居
た体て御座る　いや〳〵山ハ引すへすとも能ふ御座る夫を
はこち
えをこさしませアヽ和御侶ハやゝもすれハ此樽に目を掛て
余り面白ふもをり無よ　辞申〳〵又爰に流鏑馬か御坐る
つか是か面白イ事て御座る　夫ハ如何様な事ておりやる
先馬にハ結構な皆具を致て金襴鈍子大鈍せてん綾
むりやう錦其外種〳〵様〳〵の衣装を着連升て弓矢
持そへ乗升るか花〳〵敷面白事て御座る　夫ハ面白からふ
何と夫も少と学ふて見する事ハ成廻か　尤まなふても
見せませふか是にハ馬か入升る　やあ〳〵馬か入　中〳〵
馬にハ何かよかろふそ　去れハ何か能ふ御座ふそ
やあら何か能からふそ　申幸ひ是に竹杖か御座る是
を馬の心に致て乗りませふそ　是ハ一段と能ふおり
やらふ　去なから是にハ警固か入りまする　何しや警固
か入る　中〳〵　警固かいらハ是も某か成ふ　夫ならハ
此方にハ扇をひろけて　御馬か参ると云ふて先を払
わせられい某の馬に乗体をまのふて見せま升　先を
払わふ程に急て乗しませ　心得て御座る　お馬か
参る〳〵　はい馬〳〵　御馬か参る〳〵　馬場のけ
〳〵　喃〳〵夫をハとちへ持ておりやる　代りの
中〳〵　御馬か参る〳〵　やい〳〵あの大着者とち
へ行そ人ハないかとらへて呉ひ　やるまいそ〳〵

（山下茜）

〔仏師〕

仏師

是ハ田舎中に住居致者て御座る某此程一間四面の持仏
堂を建立致て御座るが是に未本尊か御座らぬに依て都へ
登り仏を守升て参ふと存て罷出た先急て登ふ　某ハ終
に都へ登た事ハ御座ないか人の咄を聞に広海道をさへ行ハ
疑か無と申程に先此道を登と存る是ハ都近くと見へて
殊の外賑合かに成た去ハ社都へ登り付たハ扨も〳〵奇麗
な家作哉此如中能そふにひつしりと建並た事ハ中〳〵
田舎なそにハ御座て社扨某ハ仏師と相談を致仏を作

つて貰ふと存て登て御座るか仏師の宿を存ぬやあら
何とせふそいや町表を聞に何事もよばわりさへすれば
調ふと見へた少と呼わつて見升う仏師の宿を御存の
御方ハ御座らぬか御存ならハ教て被下い爰元にハ無と見へ
た最卒と上京へ参ふ　仏師の宿を御存のお方ハ御座
らぬか御存ならハ教(ヲシヘ)て被下い　是ハ洛中に住居致
心の直にも無者て御座る何者やら町表をわつはと申す
是に少とあたて見うと存る　喃〻なふそこな人　ヤア〳〵
こちの事て御座るか　中〻其方は此広街道を何を
わつはとおしやるそ　別に聊爾ハ申ぬ真平御免あれ
是〻先お待やれ　何事て御座る　別に卒爾ハおしやる廻
か只今ハ何事をおしやつたとの云事ておりやる　扨ハ只
今申た事て御座るか　中〻　夫ならハ何を隠升うそ
私ハ田舎者て御座るか田舎に取つても後生を一大事に
心掛る者て御坐るか此程一間四面の持仏堂を建立致て御坐
るが
是に未似合敷御仏か御座らぬに依仏を作て貰ふと存て仏師
の宿を尋升る　して其仏師をお見知やつたか　但そふも無か
是ハ都の人とも覚ぬ事を被仰るゝ夫と存て御座ふならハ
つゝ懸て参ふか知らぬに依呼ハり升る　委細聞届て
おりやる其方ハ果報な人じやよ　中〻某ハ田舎に取つても
つゝと人にしられた者て御座る　辞〻其事てハ無　和御侶
を果報と云ハ都広シと云ヱ共某か真仏師ておりやる
ホウ　こわ者　是ハ何事を差升　其方か蝮しやと
おしやるに依さゝれてハと存て用心致すよ　イヤ〳〵其事て
ハ無先手をとらしませ　取ても苦敷御座らぬか　中〻
苦敷無其方のおしやるハ蝮某の申のハ真仏師しや
との申事て御座る　仏師ならハ仏師て聞て御座るに
真仏師とおしやるハ何と仕(シ)た事て御座るそ　不審尤
しや昔より運慶丹慶安阿弥とて様〻流かおりやる
中にも某ハ安阿弥のなかれしやに依真仏師しやとの
申事ておりやる　様子を聞ハ尤て御座る扨仏を
拵て被下い　中〻拵ておませう　何仏か望ておりやる
何仏と申望も御座らぬ　最前も申通り一間四面の持仏
堂に似合ふた仏を拵て被下い　一間四面の持仏堂
ならハ何仏かよかろふそ　去ハ何仏か能御座らふそ
思出た二王ハ何と有ふそ　仁王辞一寺と構た楼門抔にハ仁王
も能ふ御座ふか持仏堂に仁王ハ似合升廻　実と仁王ハ
似合廻何仏かよかろふそ　不動ハ何と有ふそ　〻不動もあの
けんまくな御面相を朝夕拝み升てハ勝気か御座る舞
実と殊勝気か有舞　何仏かよからふそ　何仏か能御座ふそ
イヤ思ひ出た爰に能お仏かをりやる毘沙門の眷属に吉祥
天女と云て現世後世とも被為守るゝお仏か有是を作て
おまそふ　中〻作て被下い　扨御丈ハ何程か能御座ふ
そ　是も何程と申事も御座らぬ一間四面の持仏堂に
似合様に拵て被下ゐ　一間四面の持仏堂ならハかう

八ツ時に構へて拝むも如何ておりやらふし　亦ツヽト腰を
かゝめ
て拝も朝夕の事なれハ太儀にもおりやらふ程つる〳〵と
寄て鳥渡拝様に人丈に拵ておまそふ　夫ならハ人丈に
拵て被下ゐ　扨明日の今時分にほしうおりやるか又明年
の今時分ほしうおりやるか　是亦格別の違て御座る
是にハ何卒子細か御座るか　中〻子細社有レ某ハ洛中
洛外に弟子を七八百人程持て居るそんてう何のお仏を
お丈何尺に拵明日早く持て寄れとさつと廻状を廻せは
みくしハ〳〵お手ハ〳〵と持寄を某か宿てにかわをとき
すまゐてちよつ〳〵ちよと付ておますに依明日の今時分
也亦明年の今時分にほしゐと云人か有ハ某の一細工を以て
ほつゝ〳〵と拵ておまる(ママ)に依て明年の今時分との云事て
おりやる　様子を承ハ尤て御座る同ハ此方の一細工かほしう
御坐レ共善ハ急けと申程に明日の今時分に拵て被下ゐ
中〻拵ておまそふか少と山越かほしうおりやる　中〻借
升うかどこ元て渡升う　三条の大黒屋て請取升う
中〻あれて渡升う　亦明日尋る為て御坐る程に此方
のお宿を一寸と見て置度ふ御坐る　辞〻某の宿をおみやる
にハ及ぬ明日爰元て仏師と尋さしませ其儘出合
ておまそふ　夫ならハ必出合ふて被下ゐ　中〻出合て
おまさう　最早号参る　おりやらふか　中〻　去ハ〳〵
能おりやつた　はあ　はて扨某ハ肝の太い事を致た
生てより以来楊枝程の物を削た事御座らぬに仏を請合
う(ママ)御座る　是と申も鳥目かほしさの儘しや　ヤア〳〵爰元
て仏師と尋る人あらハ此方へおしらしやれいや
漸きのふの今時分て御座る定て仏師殿か待て居られふ
程に急て参ふと存る　辞きのふの人か待て居られふ
程に急て参ふと存る　イヤ此方仏師殿てハ御座らぬか
中〻　此(其)方ハ昨日の人か　中〻昨日の者て御座る何と仏ハ
出来
升て御座るか　中〻出来ておりやる和御侶ハ仕合な人しや
近年
に無出来仏ておりやる　夫ハ嬉敷御座る早ふ拝みとふ御坐る
中〻おかませ升うか何所(トコ)て拝ませうそ　去ハとこて拝か
能御座ふそ　辞誓願寺の後堂て拝升う　其誓
願寺へハとふ参り升るそ　是を真直に行て左へひちをる
角じや後堂に新菰をはしらかいて置ふ程に早ふいて
拝しませ　心得て御座る扨も〳〵嬉敷事哉流石は
都て御座る昨日誂て今日出来致様な大慶な事ハ御坐
て社扨誓願寺へハ号真直にいて左へひちをる角とやら
申されたか辞此寺て御座らふ　先後堂へ廻り升う去ハ
社新菰か有取升う扨も〳〵殊勝に能出来させられた
さなから爰拝ならハ人の様に御座る是ハ如何な事お耳の
隣をいらふてミたれハ人肌か致スか合点の行ぬ事て
御座る其上御印朦か気に入らぬ程に仏師殿に相談を

致直て貰升う申〻仏師殿御座るか　是に居るよ
何と拝シ升したか　中〻拝升て御座る扨〻殊勝に
能ふ出来まして御座る去乍爰に不思義な事か御座る
お耳のあたりをいろふて見たれハ人肌か致て御座るかあれ
ハ何と致た事て御座る　夫ハ其様な事もおりやらふまた
膠か乾ぬに依て左様な事もおりやふ　是ハ其様事も
御座ふ其上御印朦か気に入ませぬ程に直て被下い
中〻直ておまさふ早ふいて拝ませ　心得て御座る御印朦
を直とおしやつたか何と直たかしらぬ去ハ社直り事は
直たか何とやら物ほしそふな御手つきて気に入らぬ直て
貰升う申〻仏師殿御座るハ　是に居(ヲル)よ何と拝ましたか
中〻拝升て御座るあれハ何とやら物ほしそふなお手付て
気に入ませぬ直て被下い　直ておませふ早う居て拝
ましませ　心得て御座る何と直たかしらぬ去ハ社直た
乍去是も何とやら童の様なお手付て気に入らぬ直て
貰ふ申〻仏師殿御座るか　是に居るよ何と拝しましたか
直り事ハ直て御座るかあれハ何とやら童の様な御手付て
気に入ませぬ直て被下い　中〻直ておませふいて拝し
ませ　去乍何とやら今日ハ物かちろ〳〵と致て悪(ハル)ふ御座る
程に此方あれへ同道致て爰かわるいあそこか気に入らぬと
申て直て貰度御座る程にあれへ来て被下い　尤行
度物なれ共殊の外宿に細工か手つかへて居るに依得参る
舞　某の宿て印を一ツ結へハ御印朦ハいか様にも直る程に
早ふいて拝しませ　夫ならハ仏と申時ハ仏を拝ませて
被下ふす又仏師殿と申時は必此方出合て被下い　中〻
安事出合ふておまそふいて拝しませ　心得て御座る
乍去今度ハ仏ておりやるそや　中〻仏て御座る　仏〳〵〳〵
何と直たかしらぬ是も気に入らぬ直て貰ふ申〻仏師
殿御座るか　是におるよ　あれも気にいらぬ直て被下い
中〻直ておまそふ今度も仏ておりやるそ　中〻　仏
〳〵〳〵　是も気に入らぬ直て貰仏師殿御座るか
何と拝しましたか　あれも気に入らぬ直て被下い
直ておまそふ　仏ておりやるそや　中〻仏て御座る
仏〳〵〳〵　是も気に入らぬ　仏師殿こりや
仏ハ　こりや　仏師か　こりや　ヤイあの横着者
真平免て呉い〳〵　やる舞そ〳〵〳〵

（山下茜）

〔布施無経〕

布施無経

シテ　是ハ此隣に住居致す出家て御座る今日ハ斎日て御
座る程に旦那廻りを致ふと存て罷出た先そろり
〳〵と参らふ此間は打続て隙入か御座たに依参り
度方へも無沙汰を致て御座るいや参る程に是ハ愚僧
の一旦那しや程に是から仕舞升う物申案内もう

アト〻表に物申と有る案内とハ誰そ物申とハ　シ〻愚僧て
御座る　ア〻辞御坊様能社被為出て御座る　シ〻此間は
久敷お目に懸りませぬか替らせらるゝ事も御座らぬか
ア〻中〻替る事も御座りませぬ先号被為通い　シ〻通り升う
ア〻夫に緩りと御座りませい　シ〻心得て御座る追付勤を
初升う
ア〻能う御座り升う　シ〻いや申此程ハ花を取に被遣た物
を新発意共か進しませんたと申たに依て跡てしかり
升て御座る　ア〻夫ハ少しも苦敷無事て御座る物を
シ〻いや日外ハ御母儀様の御参詣て御座り升たに折節
寺も取込早々にお返し申て残たふ存升る
ア〻辞殊の外御馳走に預りましたと申て吹聴致しまして御
座る
シ〻いや左様にも御座りませぬ拝南無ぎやらたんのうとらや
あやあ扨勤を仕廻まして御座る最早号参り升る
ア〻先少トお茶を参つて御座りませぬか　シ〻いやまた方
〻へ寄
升るに依号参る　ア〻扨お帰り被成升るか　シ〻中〻〳〵
両人〻さらハ〳〵　ア〻よふ御座り升た　シ〻はあ荒不思儀
や毎
定て布施を十疋呉らるゝか今日ハ沙汰か無か合点の行
ぬ事て御座る取らすに戻ふかいや〳〵今此儘て置た
ならハ若夫か例に成つて重てから布施無経を続(ママ)は如何
しや程に立帰て彼仁の気の付様に布施と申事
によそへて面白おかしう云て見升う申御座り升るか
ア〻誰て御座る　シ〻愚僧て御座る　ア〻いや御坊様また帰ら
せられませぬか　シ〻戻ふと存て門迄出升たれハ門前に
大イ犬かふせつておりまする愚僧ハ犬かきらいて御座る程に
何卒伏セ起イて下されい　ア〻あの犬ハ無事な犬て御座る
程に構す共通らせられい　シ〻左様てハ御座らふか何とやら
おそろしふ御座る程に何卒伏セ起イて被下い　ア〻何とも
致す事てハ御座らぬ其儘通らせられい　シ〻夫ならハ号ふ
参り升る　ア〻御座ふか　シ〻中〻両人〻さらハ〳〵　シ〻是
ハ如何な
事手を取てくゝむる様に申ても合点か行ぬそふな
何とせうそいや又参つて申様か御座る申御座り升るか
ア〻誰て御座るそ辞此方ハまた帰らせられぬか　シ〻其事て
御座る申度事か御座つて立帰りまして御座る　ア〻夫ハ何
事て御座るそ　シ〻別の事ても御座らぬ此方には哥
道にすかせらるゝと承つて御座るかさ様て御座るか　ア〻いや
すくと申程の事ても御座らぬか少〻ハ心掛升る
シ〻夫ならハ此中去方て能イ古哥を承つて御座る依て
是を申て聞せ升うと存てわさ〳〵立帰り升た
ア〻夫ハ忝ふ御座る仰聞されませい　シ〻申て聞せ升うその
原やふせやにおふる母木〻の在とハ見えてあわぬ君哉
申哥て御座るか何と面白い哥てハ御座らぬか　ア〻是ハ

面白い古哥て御座る　シ〳〵此上の五文字ハ御失念被成ても
次のふせやにおふるをよふ覚させられたかよふ御座る
ア〳〵成程覚へ升て御座る　シ〳〵御合点て御座るか　ア〳〵如何
にも合点
致て御座る　シ〳〵是を申て聞せまふと存てわさ〳〵立帰り
升たもふ号参り升る　ア〳〵忝ふ御座る　両人〳〵去ハ〳〵
シ〳〵扨も
〳〵鹿の角を蜂かさいた様にも無また気か付れぬ
何と升そいや思ひ出た又参て申様か御座る申
御座り升るか　ア〳〵誰て御座る　シ〳〵愚僧て御座る
ア〳〵辞御坊様また帰らせられぬ　シ〳〵年か寄れば物忘を致す
又思ひ出た事か有て戻升た　ア〳〵夫ハいか様な事て御座る
シ〳〵此方にハ内〻教化か聞度いと仰られたに依少ト咄て
聞せ升うと存て態〻戻升て御座る　ア〳〵夫ハ忝ふ御座る
承り升う先号通らせられませい　シ〳〵心得升た　ア〳〵夫に緩
りと御座りませい　シ〳〵心得て御座る去らハ説て聞せ升う
先身命財をなけうつて伝法専と欲せハ供仏施僧捨
身の行雲と成雨と成り不晴不晴別離の思ひといふ
事を御存て御座るか　ア〳〵辞其様な事ハ存ませぬ
シ〳〵か様に申てハ堅ふて中〻お耳へ入升舞和らけて
説て聞せ升う　ア〳〵夫ハ別て忝ふ御座る　シ〳〵先身命
財とは身ハ身命ハいのち財ハ宝とかゝせた文字て御座る
此財宝をなけうつて後生を願へと申事て御座る
ア〳〵尤て御座る　シ〳〵扨伝法専ハもつはら法をつたゆる事
供仏
施僧とは供仏ハほとけに物を備ふ事何にても常に
備付た物を失念無毎の通りに備へたかよふ御座る
扨施僧とハ僧にほ□こすと書た文字て御座る出家に
は何に寄らず物をお□まずにくわらり〳〵と施すか専て
御座る何と御合点て御座るか　ア〳〵中〻合点致て御座る
シ〳〵又捨身の行とハ身を捨る行とかゝせた文字て御座ると
申てむかつに海川へ身を捨る事てハ御座らぬ只一心不
乱に仏道を行ふ事て御座る　ア〳〵尤て御座る　シ〳〵扨雲と
成雨と成と申心ハか様に晴天にても俄に曇り心の迷ひ
と成事て御座る不晴〳〵と言ハ心のはれやらす
〳〵と云事て御座る此不晴〳〵か肝心の所て御坐る
程に篤と能ふ聞せられたか能ふ御座る何と御合点か
参つて御座るか　ア〳〵如何にも合点致て御座る　シ〳〵いや最前
から合点かいた〳〵とはおしやれ共一円合点か行ぬそふ
な　ア〳〵篤と合点致て御座る　シ〳〵扨別離の思ひと申ハ
わかれはなるゝと申事て御座る則古哥にも御座る
逢ふ時は語り尽すと思へとも別れに成れハ残る言の
葉とあの人に逢ふたならは咄ふ物をやらふ物を取ふ
物をと思へとも必わかれに成れは失念か有りたかる物しや
程に此方にも御失念被成た事か有ラハ今ても思ひ出て
やる物かあらハやらせられたかよし又取物か有らハ取つた

か能ふ御座る構へて是か仏法の肝文しやに依咄升る
篤と能ふ合点のさせられたかよふ御座る　ァ〳〵篤と合点
を致升て御座る　シ〳〵扨最卒説て聞せ升うか亦用事
も御座る程に是迄に致ふ　ァ〳〵是ハ難有事を承り升て
一入信心も弥増升て御座る　シ〳〵最早号参る　ァ〳〵先少と
休らふて御座りませい　シ〳〵又寄方も御座る程に号参り
升る　ァ〳〵御座らふかシ〳〵中〻両人〳〵去ハ〳〵ァ〳〵忝ふ御さるよふ
御座りました　シ〳〵はあ―。扨も〳〵鈍なわろて御座る今
の様に申ても中〻思ひ出されぬ何と致ふそア、
愚僧ハ凡夫の浅ましさに迷ふたり〳〵むりめう〳〵
として六趣有り覚て後に大船もなし夢の内にして
色〻の事を見れとも覚れは本の身なり有と思へは
有のけんないと思へは無のけん有無の二道をはなれて
社ハ出家なれ彼拾疋の鳥目を真中よりふつゝとねじ切て
大海へくわらり〳〵とまき捨た心持して戻るに戻ら
れぬと云事か有ふかけつく毎より足早にいんてのけふ
とは存れ共彼十疋の布施物を左りの袂へ入たれは
右ハ軽し右へ入れは左りか軽しかろいと重ひを引合て
戻れハ心面白ふ御座るか如此に手ふらて戻れは片心
にかゝつて気味かわるひ最早口のすふ成る程云て見たれ
共馬の耳へ風の吹た程にもなひ何とせうそ辞思ひ
出た布施経（マヽ）にハ袈裟を隠すと云たとへか御座る今度ハ
此袈裟を隠て方便を以て思ひ出させふと存るはて
合点の行ぬ今迄爰にあつたかとちへいたそ不思儀な
事て御座るァ〳〵荒不思儀や誰やら通つたやうなり辞此方に
わ何とて帰らせられて御座るぞ　シ〳〵辞少と尋る物か御坐る
ァ〳〵何そ見へませぬか　シ〳〵いや袈裟を爰に置たかと存る
か見へ
ませぬ　ァ〳〵辞御袈裟ハ最前掛て御座つたかと存るか
シ〳〵辞最前教化の時分側に置たかと存るか出升たらは
持せて被下い愚僧か袈裟ハ隠も無印か御座る
ァ〳〵夫ハいか様な印て御坐る　シ〳〵別の事ても御坐らぬ持仏
堂に掛て置升シたれは燈明の油か懸つたやら鳥目
ならは十疋斗通る程鼠か喰さしき升シたを愚僧細工
にふせつぎを当て布施縫に致て置升た是か能
証拠て御座る程に出升たらハ頼升る　ァ〳〵中〻出ましたなら
ハ持て進し升う　シ〳〵然（去）らハ号参り升る　ァ〳〵御座らふか
シ〳〵中〻両人〳〵去ハ〳〵ァ〳〵いや申〻少と待せられい　シ〳〵何
事て御座る
ァ〳〵少と失念致た事か御座る程に待せられい　シ〳〵辞〻愚
僧ハ
用事か御座る程にさふ致てハ居升廻イ号参る　ァ〳〵平に待せ
られい　シ〳〵はあ何事て御座るそ笑漸と思ひ出されたそふな
ァ〳〵申〻面目も無事か御座る　シ〳〵夫ハ如何様な事て御座
る　ァ〳〵毎も定
つてお布施を進升るをはたと失念の致て御座る是〻

取らせられて被下い　シへはて扨むさとした事を云せらるゝ
夫を今取いて叶ぬ事てハ御座らぬ重てても下されい
アへ最前教化を承てからハ嘉例をはつせは後生かおそろしう
御座る程に平にとらせられて被下い　シへ愚僧最前から度〻
立帰て御さるに依思召も如何な来月一所に貰升う
アへ来月ハ来月是非共に進ねハ成ませぬ　シへ辞〻愚僧ハ
最早
号参るアへ夫ならハ懐へ入升る　シへ辞〻　アへ申〻是は何
ンて
御座るそ　シへ笑申お布施を被下たれは尋る袈裟迄か
出升て面目も御座らぬ　アへ辞申〻苦敷御座らぬ先
待せられいくるしう御座らぬ　シへ免て被下い　アへはて
苦敷
御座らぬまたせられい〳〵　シへはつかしやの〳〵

（加藤彩）

〔縄なひ〕

縄なひ

是ハ此隣の者て御座る召仕ふ者を呼出て申付る事
か御座る太郎冠者居るかやい　はあ　有るか　御前に
汝を呼出すハ別の事てもなひ何の誰へ使に行てこい
畏て御座る　いて云ふにハお約束の太郎冠者を遣し
まする委細は此文の内に有と云ふて持て行け
左様に申せハ御合点て御座るか　兼〻の約束しやに依
て合点しや定て待兼て居られふ程に早ふ行け
畏て御座る是は合点の行ぬ事を仰付られた去乍
お使の事しや程に急て参らふお約束の通り太郎
冠者を遣しまする委細ハ此文の内に有ると仰られた
か何共不思儀な事て御座る参つたならハ様子か知るゝて
御座らふいや参る程に則是しや物申案内もふお宿
に御座りまするか　いや表に聞馴た声て物もふと有る
案内とは誰そ物もふとハ　私て御座りまする
ヱイ太郎冠者よふ来た太儀じやよ　頼ふた人のお使に
参つて御座る　そちを越るゝ筈じや何と云ふて越れた
そ　頼ふた人被申升るお約束の通太郎冠者を遣し
升る委細ハ此文の内に有ると被申升る　とれ〳〵是へ
おこせこふ云ふて越るゝ筈しやヤイ〳〵太郎冠者向後
某の家来じや程にそふ心得い　やあ　そちハ向後家来
しやとの云事じや　夫ハ又何と致いて此方の御家来
にハ成ましたそ　様子ハ後て知るゝ事じや某を頼ふ
た者しやと思ふて奉公を勤て呉い　夫ハ合点の
参らぬ事て御座る　夫ならハ立帰て様子を承て参り升ふ
是〻先待て　何事て御座る　夫程に思ふならハ咄いて
聞そふ是へこゐ　畏て御座る　別の事ても無何を隠ふ
そちの頼ふた者と勝負つくをして汝を取らふの

やらふのといふて某の勝に成つて汝を取た向後某の方
て勤て呉ひ　様子を承れハ御尤て御座りまする去なから
如何に勝負つくを成さるゝと御座つても私をとらふのや
らふのと仰られて此方にもよふも〳〵取らせられ升たの
某はいやしやと云ふたれとも是非共にとおしやるに依是非
なふ取つた何方て勤るも同し事じや程に某の方て勤て
呉ひ　仰らるゝ通り何方て御奉公致まするも皆お主への
お為て御座れハ此方へ御奉公仕ませう　又お馴染の事て
御座る程にお目を懸させられて被下ませひ　何が扨久〻
の馴染の事じや程に随分目を掛て遣ふてとらせふ
夫は忝ふ存升る　扨汝か来ると待て居た遠路へ使に
いて呉い　遠路へお使に　中〻　お安い事ては御坐
れとも私ハ此間肭気か起りまして只今是へ参るにも
膝をもミ臑をさすり漸〻是迄参つて御座る程に
遠路へのお使ならハ御免されませい　何といふそ肭気か
起たに依て遠路へハ行れぬ　中〻　夫ならハ何そ
下にいる役を云付ふ近日普請をする程に縄をなふて
呉ゐ　縄て御座るか　中〻　是もお安い事てハ御座
れ共私ハ空手か発て縄をも得なふ事ハ成ませぬ
何といふそ空手か発て縄をも得なふ事ハ成らぬ　中〻
はて扨そちハ達者な者かと思ふたれは思ひの外病身な
者しや其様な者は遣われぬ連ていて余の者と替て
貰ふ　夫は兎も角もて御座る　さあ〳〵こゐ〳〵
畏て御座る　そちか頼ふた者は聞へぬ随分無異な
者じやとおしやつたに依取つたか思の外病身な者じや
私の病身な事ハ頼ふた者にハ隠いておりまするに依て
左様に被申たもので御座りませう　いや何かといふ内
に是じや汝ハ夫に待て居よ　畏て御座る　物申
御亭主御座るか　物もふとハとなたて御座る　某て御坐る
いや誰殿よふ社出させられて御座る扨只今太郎冠者
を遣しましたか何と別条なふ勤まするか　其儀に付て
参て御座るあれは常〻達者なものと存して御座れハ
殊の外病身な者て御座る遠路へ使に行と申たれハ
肭気か発てと申参りませす夫ならハ縄をなふて
呉ひと申て御座れハ空手か発たと申て得ないませぬ
あの様な病身な者ハ遣われませぬ余の者とかへて被下い
はて扨夫ハ合点の行ぬ事て御座る随分達者な者て
御座つて殊に縄をなふハ得物て御座るか是ハさ様の
事も御座らふ最前其方へ遣しまする時ハ様子を申
さすに遣ひて御座るに依てきやつか腹を立て夫ゆへ
不奉公を致いた物て御座らふ私の如才ない通りを遣ふ
て見せませう程に此方にハ裏道より戻らせられた分て
物陰より除て見させられい　是ハ能ふ御座らふ
遣ふて見させられい　先是へ寄て御座れ　心得て
御座る　やゐ〳〵太郎冠者戻つたか〳〵太郎冠者〳〵
誰殿ハ帰られましたか　中〻そちハ遣われぬによつて

余の者と替て呉ひといふて裏道より戻られた
左様なれハ申上ませふいや申〻此方にハいかに勝負つく
を成さるゝと御座つても私を取ふのやらふのと仰られて
よふも〳〵誰殿の方へ遣わされましたの　汝か恨むる
か尤しや某かわるい程に堪忍のして呉ひ　其上か様〳〵の
事て遣ハすとなりと仰られますれハお恨とも存ませぬ
肝斟の時には一命を差上ませうと存る程の心底て御座る
者を様子をも仰られいて遣わさるゝと申ハお情ない事
て御座りまする　汝かいふ所ハ一〻道理しや何事も某か
誤た此上ハ手を提る程に堪忍をして呉い　ア、勿体ない
〳〵此方の左様に仰らるゝ物を何とてお恨を存ませうそ
只今迄の通召遣われて被下ませい　只今迄の通り目を
懸て遣ふとも　夫は別て忝ふ存まする　扨汝ハ
夫程の心底て何とて誰方てハ不奉公をしたそ
去ハ其事て御座る惣して人には添ふて見よ馬にハ
乗て見よと申まするか誰殿ハ人遣ひのわるひ人て御坐る
先あれへ参て下にも置れませひて汝かきたるを待て
居た遠路へ使に行と被申升る畏たと申たならは
昼夜限らす申付られうと存て肴気か発て御座る
に依遠路へのお使ならハおゆるじ成されいと申て参り
ませんた　是ハ出かいた　夫ならハ何そ下に居る役を
云付ふと有て縄をなへと被申まする御存の通り
縄ハ私の得物て御座れ共いかな〳〵ないませうそ空手か
発てなわれぬと申て是をないませなんた　いや夫に
付て思ひ出た日外の縄は何としたそ　またないさし
て置ました　急に入事か有程になふて呉まいか
何か扨ないませいてハ先縄を取て参りませう　早ふ取
てこひ　畏て御座る扨此方へ申上たい事か御座りまする
先此縄の先を扣させられて被下ませい　心得た　私の
縄をなふ間に誰殿の方の様子を咄てお聞せ申
ませういや申誰殿ハ男の事て御座るに依左様にも存ま
せぬか鬼の女房にハ鬼神かなるとやら申か定て
御座るあの女房衆ハわゝしい人て御座り升る先あれへ
参て見まするに髪と申せはいつ結ふた儘しややら
薄の穂をみだいた様にはつ〳〵と致されましてわめ
かれまする顔ハ二夕目と見られた物てハ御座りませぬ　笑
其上朝寐を致されまする昼寐を致され升るそこへ
目か覚ると茶を呉い〳〵て御座る少と返事か遅けれハ
なせに返事をせぬそと申てわめかれまするおそろしい
事て御座る扨畏たと申て茶を持て参れは今度
ハ酒を呑ふで御座る何か大茶碗てつかけ〳〵呑れま
して目に角を立てわめかれ升る顔を今も見る
様に御座る　笑　其上子供衆ハ大勢御座りひとりの
子か乳すおふと申せは又一方よりハ湯を呑ふの茶を
呑ふのとア、かしましい事て御座る　笑　女房衆もうる
そふ思われまするやらヤイ太郎冠者少ト連ていて

すかせ〳〵と被申まするに依畏たと申てひとりの子を
抱ふといたせハおれもたかれふ我もおわれふと申て濯
に取付袂にすかりア、うるさい事て御座りまする　笑　私
も
腹か立まゝ物影へ連て参つてしくりとつめつて御座
れはワア〳〵といふて泣れ升る　笑　夫を女房衆の
聞付られましてはて合点の行ぬ事しや機嫌のよい
子も太郎冠者かすかせは泣か相生てもわるいかなとゝ
申されまする　笑　相生のわるい社道理なれしくり〳〵
やいそこな奴　此方にはまた帰らせられませぬか
また帰らせられませぬかとよふ某の讒奏をしたな　いや
讒奏ハ致ませぬ誉まして御座る　其上某の子供
を打擲したな　いや打擲ハ致しませぬ愛を致し
ました　やいあの横着者只置事てハ無そ
真平免て被下い〳〵　とちへにぐるそ人ハなひ
かとらへて呉いやるまいそ〳〵〳〵

（野崎典子）

〔歌仙〕

歌仙

是ハ藤原の何某にて候君よりの宣旨にハ内裏に
おゐて御歌合の御遊有へきとの勅定なれは此由相願
申さふするやあ〳〵皆〻承り候へ御門よりの宣旨には
御歌合御遊有へきとの勅定なれハ我と思わん哥人
達ハ早〻相勤られ候へ其分心得候得〳〵　治る御代
の歌合〳〵急叡慮に叶わん　小町童ハ小町の小町
にさむらふ　シテ是ハ花山の僧正遍昭にて候　人丸磨呂ハ
柿本の人丸にて候　某ハ在原の業平ニ而候　拙者は
猿丸太夫にて候　清原の元輔にて候　シテ扨何れも何と
思召そか様に天下泰平に納る御代なれは哥合の御遊
参代致す様な目出度事ハ御座る舞そ　人丸いか様是ハ遍昭殿
仰らるゝ通りなあ　皆〻中〻目出度事ハ御座ツて社　シテい
さ参代
致ませふ　人丸能ふ御座らふ　シテさあ〳〵御座れ〳〵　皆〻
心得て御座る
何れも御座れ　ミな〳〵心得て御座る　シテ定て何れもには面
白哥
を読せられたて御座ふ　人丸辞別に何も面白事も浮み
ませぬが定て業平殿には能お言が御坐ふ　業平辞某ハいと面
白ふも御座らぬか定ていつれにハ能お言が御坐ふ　猿丸辞某
杯も左様の事も御座らぬか元輔殿にハ能お言か御坐ふ
辞某とても何も面白事ハ　御座らぬ　シテいや何角と申内
に
是は内裏て御座る　人丸其通りて御座る　シテ先当守の衆へ
案内

を乞升う　人丸能御座らふ　シテ如何に此内へ案内申候　当守
案内
とは誰にて渡り候そいや何れもの参内にて候よ先
御殿へ御通り候へ　シテ心得へて候いつれも通り升う　ミな〳〵
能御座ふ
当番御簾もおりて間思ひ〳〵の哥を被遊候へ　シ心得て候さ
あ
〳〵くつろかせられい　ミな〳〵心得て御坐る　シテ扨何れも
遊ひ
たならハ能御座らふ　人丸先遍昭殿読せられたならハ
能ふ御座らふ　如何様是ハ遍昭殿の読せられたならハ
よふ御座らふ　辞〻是ハ先人丸殿読せられい　辞〻
先遍昭殿被成ませい　シテ夫ならハ兎も角も致升う面
白ふも御座らぬが調て参て御座る人丸詠吟を頼升る
人丸扨も〳〵是ハお早事て御坐る夫ならハ夫ならハ某の詠
吟を
致升う　天津風雲の通ひじ吹としよ乙女の姿しはし
とゝめむ　是ハ何れも何と思召そ殊の外出来させられて
御座る　業是ハなあ　皆〳〵中〻　人丸面白ふ御座る　シ左様
にも御坐らぬ
人丸請帳へ写升う　シテ頼み升る　人丸さあ〳〵何れも読せら
れい
業平先人丸殿被成ませひ　人丸辞先何れも読せられい　シテ是
ハ人丸殿
被成たらは能御座ふ　人丸夫ならハ遍昭殿詠吟を頼升る
シテ何か扨某の致升う　人丸宿より調て参つて御座る　シテ是
ハ又
お早事て御座る詠吟の致升う。ほの〳〵と明石の浦の
朝霧に嶋隠行舟おしそ思ふ何れも何と思召そ人丸殿
ハ別して出来させられて御座る　人丸何と御座るか　業平辞
殊の外
面白ふ御座る　シテ御帳へ写升う　人丸頼升る　シテさあ〳〵
何れも
被成ませひ　猿丸先業平殿被成ませひ　業平辞先猿丸太夫殿
読せられゐ　猿丸先業平殿読せられゐ　人丸如何様業平殿
読せられたならハ能御座らふ　夫ならハ某のもいと面白ふ
も御座らぬか宿より調て参つて御坐る詠吟を頼升る
是ハ又お早事て御坐る詠吟の致升う　千早振神代も
聞かす龍田川唐紅に水くゝるとは申何と思召そ是ハ
いさき能い句て御座る　シテ如何様いさぎ能句て御さる
是は
出来させられて御座る　業平何と御坐るか　人丸殊の外出来
升て御坐る
お帳へ写升うさあ〳〵猿丸太夫殿読せられい　猿丸先元輔
殿被成い　元輔先此方読せられい　猿丸夫ならハ少と案して見
升う　シテ猿丸太夫殿ハ退席に被成るゝと見へて御坐る

人丸是ハ亦御老人のお達者な事て御坐る　ミな〳〵　其通りて御座る
猿丸読み升て御坐る　シテお早い事て御座る　猿丸是を慮外なから
詠吟を頼升る　心得て御座る扨も〳〵お達者な事て
御座る奥山に紅葉踏分鳴鹿の声聞時そ秋ハ悲し
きいや申毎是ハ又格別出来させられて御座る　是ハ殊の
外出来させられて御坐る　人丸さあ〳〵元輔殿被成い
元某も宿より調て参て御座る詠吟を頼まする　人丸何か
扨某の詠吟を致ませう水の面に照月なみをかそふ
れは今宵そ秋の最中成けるハア是ハ又元輔殿にハ
出来させられて御座る　元左様にも御座らぬ　人丸御帳へ写
升う
シテ能御座らふさあ〳〵小町も読しませ　小町童も此程遊を
わつて考へ升れ共面白事も浮ミませぬ各へお目に懸
升るもお恥敷御座れ共夫へ読せられて被下ませゐ
人丸とれ〳〵某の詠吟のしておまそふ　小町頼升る　人丸色見
得てうつらふ物ハ世中の人の心の花にそ有ける小町ハ
殊の外面白う御座る　シテ実と小町ハ格別の事て御座る
小町殊の外出来ておりやる　小町お恥敷御坐る　人丸何れも
何と
思召そ殊の外面白事てハ御座らぬか　殊の外出来升て
御座る　色ミへて。で。いや申遍昭殿何と思召小町の思ひ
寄て読れて御されが某の存るハ此色見へてをでと
濁ツたならハ一入能ふ御座らふか何と御座らふそ
ミな〳〵人丸殿の仰てハ御座れ共是ハ色ミへてとすんて社てに
はもよふ御座れ濁てハ能ふ御座る舞　人丸いや〳〵是ハ何
れも何と思召そ濁ツたかよふ御座ふ　ミな〳〵如何様是ハ濁た
かよう御座らふ　喃〳〵小町濁らしませ　小町童は此てゞ
もた
せた句て御座る程に濁る事ハ成ませぬ　シテなふ〳〵人丸殿
是ハ小町の申通りてゞせた哥て御座る其上をひいきに
思ふて色〻と申に皆の濁と被仰るゝ　なふ小町必濁らし
升な　小町中〻濁事てハ御座らぬ　シテ夫〻濁らし升な
人丸なふ遍昭殿某も小町をひいきに思へはこそか様に申す
其上
何れも濁れと仰らるゝに其方壱人すめと云ハ如何様な
事しやそ　シテ其方ハいな事をおしやる小町をひいきに思
ふに依
か様に申たとへ此上は小町か濁らふと云共中〻遍昭か濁
らする事てハなひ小町必濁らし升な　喃遍昭其方は
いな事を云小町か濁ふ云共遍昭かにこらせぬと其様な事を
いふたならハ悔しい事か有ふそ　何と悔敷事の有ふ覚
へハ無よ　人丸其様な口こわな事を云ふたならハ目に物見
するそ
夫ハ誰か　某か手柄に　目に物を見するも人に社よれ

其方の分として目に物を見せ立ハ置ておくりやれ
人丸夫ハ誠か　シテ誠しや　人丸真実か　シテ真実しや　人丸一定
か　シ一定しや
何れも打擲致升う　シテ某も負る事てハなひ　人丸己覚た
か〳〵　シテ是ハ何とするそ　人丸何とするとハ其様な事を
皆〳〵ていど言か〳〵シテあいた〳〵〳〵〳〵小町申〻是ハ何
事を
被成升る　シテなふ悲しやの〳〵やい己等某を寄て此様に
打擲したなたつた今に身をかろふして思ひしら
せふそなふ腹立の〳〵〳〵　口惜しやの〳〵　告手やあ〳〵
何と云ふそ夫は誠かはて扨苦〳〵敷い事じや急て此由
を申ふ申当守の衆ハ御座るか　誰て御座るそ　某て御坐る
只今承れは遍昭と口論を被成て夫を殊の外腹を立られ
押付是へ押寄て参らるゝと申程に御用心を被成たらハ
能御座り升う　はて扨夫ハにか〳〵敷事て御座る急
て其由を申升う少と夫に待せられゐ　心得て御坐る
申御座り升るか　何事て御座る　只今承ハ僧正遍昭
と口論を被成たと申か実て御座るか　辞口論と申程
のの事ても御座らぬか哥の手にはを何かと被申た
に依少と打擲致て御座る　夫を殊の外腹を立られ押
付是へおし寄て参らるゝと申程に少と御用心の遊ハひ
たならハ能ふ御座り升う　別に深しい事も御座る
舞程に構すとも置せられい　さ様でハ御され共若怪我
か御座れハ如何て御坐る程に平に御用心を遊ひたならハ
能ふ御座り升う　此方の何かと仰らるゝ程に夫ならハ
用心を致升う是へ寄て拵て被下い　心得て御坐
る申此方も是へ来て手伝て被下い　心得升た
拵ハ能ふ御座るか　大方能ふ御座る　申迄ハ御座らぬか
随分防て被下い　心得て御座る
シテ抑是ハ。花山の僧正遍照（ママ）とハ。我事也（謡切カイザホヲロシタテ、持）
皆〻三拾六人の歌よみともハ。〳〵皆家〻の哥を
あらそひ。哥仙するこそ。ふしきなれ　人丸其中に人丸
皆〻其中に人丸進ミ出て。ほの〴〵見れば花山の僧
正遍照（ママ）ハ。馬よりおりて。腰いたけれ共人丸に渡り
合むつと組ハかれもくみ是も組くんすくまれ
つ哥よみ共ハ。〳〵ミな腰おれとそ成にける

（近藤愛）

（終）